大伴金道忠孝圖會 前編 四

へ13
2692
4

へ 13
2692
6

早稲田大学図書

大伴金道忠孝國會前編巻之四

目録

妬婦陷月小夜 并 去王岩彦弘義
金烏暴悪刑嬖妾 并 垣雅明恨金烏
金烏が残忍愛妾月小夜を鞆責かする図
雅明療牛尾兒 并 雅明仕金烏
死霊殺妬婦 并 金烏懸相搜
妬婦ホ夜月小夜が怨魂ホ悩まかる図
金烏毒計狂兄 并 亀山大梟討牛尾

奸計と肆ふ　金烏其兄馬來田と毒害する圖

橘白蟲干女王生遠計

橘白蟲懐幼主去國　并雅明會亀山

懐幼君白蟲夜城を踰る圖

雅明再仕金烏　并猪尾　呵青芙蓉田子

芙蓉田子が危難異翁幼君を救ふ圖

猪尾見怪夢　并金烏誤斬猪尾

亀山寄大伴吹負　并霊狐報舊恩

大伴金道忠孝圖會前篇巻之四

浪華　好華堂野亭考選

婦人小夜　并去王山石彦死義

古帝小曰寵極く禍多し王照君八角く美貌を憑く醜悪の形小寫され遂小胡地琵琶行の歎あり紅顔薄命八佳漢も其例多し中小悼し八垣乃雅明が妹の月小夜が身上なり思もよけど異將金烏が嬖妾となり昼夜針の席小坐して思を和し憂小つけても想人小公乃よと告ちて世其を此世のありしで小刃小伏く九泉の旅小赴んと。過半日の間を得て多を志すめ春衝が行へ贈る小薄き心の人手小奪取猶も志ざり其人の反書の来るまでと頼て流石小身を捨も得果ぢ心待小ならるる小彼栖守と云へ側室も八奪ひ文を抜き

寄こぎりて續ひろふ度垣間見しよう忘うこれ暮心のもとを
いと細くと書續けれど互ひ面を見合こ言と吐く笑坪ホ入見ハ願ても死
途言の種を得うとひそあ合金烏ガ飯館と待居々るホ其日の申刻頃
ホ飯城し持の得物の手しおや最不真げホ樂まざる紅色ホく廊下に
さしろ戸側室仁ハ物陰より窺ひもし廊下の曲所ホ件の文を封切仕
捻ると足ばやホ立隠と其動止を覗居々り金烏ハ何心なく廊下の板間
を歩けあ踏立て奥へ通りんとする処ホ廊下の曲所ホ文書の落散られど
心ホ疑ひ手ホとり上封を切つ手披續ひ手ホ文より贈る艶書なれば驚き孤
疑深ち性ホ心中怒ぶり常の居間ホ入座ホ着や否件の文の本末と熟く
と續ひろふ正し愛立交月小夜うま跡なりれ忽ち憤怒ノ心火胸中ホ焼
紅色朱とそるるる如く変じ眼を瞋しられん荒く者ども月小夜を疾く

連来よと呼ぶる其声雷のごくあれば近侍の青侍怪ましみ唯と答て月
小夜ガ丙舎ホ馳いり殿の御飯館有るホあど疾出迎へ申さるる召せ申ふ
ホ主ぞ御前へ出ホ参ると急ぎ参る月小夜ハ殿と二字を宣ぶふるるき
思へども せんを参なく姿刷ひて金烏ガ居間へいり両手伏つ跪く狩りの労
を称ぎしひるホ金烏を物を言ぞ月小夜ガ翠華の髪と左手ホ指と捫
右手の拳を鑓の槌のごく振り固めて花のごく粧ひる嬌面と續さるホ
眸キるホぞ思もうけぬ月小夜ハ苦と叫く岡苦く言ひと殺るを見ある
ぞ只絶も入参れ風情なり金烏ハ益怒激しく髪と捫ー仮賜ト
ホ引伏者ども此淫婦め我縛上よと下知を近習ハ姑より一撃を浴
何の故ぞ我まぞ手ホ汗を振て居うるホ今ぞ叫喝今ホ再び
殺れおぐる唯と答く青縄ぞて加れば金烏ハ月小夜を小児の如

二三間むこう噇ど投ゆり多くと近習仆倒すく思ふ高手ゆぞ縛
ゆる。月小夜ハ夢ゆ由め只〻心地〻半死半生の体ゆく涙雨のでくに暗
ぎ居こう。金烏居丈高ゆなり眈と睨て曰ゆ汝れ虜酋女郎我日本の思
恵を由顧ずどよゆ奸夫と通じ多るよゆ。王の眼と偷くる天罰早く由面
く。你が密夫ゆ贈る書信我手ゆ入く爰ゆ在〻る證迹ある上ハ隠する
ゆよも紛わ〻じ。只よく〻你が慈慕ゆ春衝ゆ搦捕。両人とも牛裂の刑
ゆ行ふ。者ども猪尾と呼れと呼り汝れ。近習領掌して侍所へ支
支り行多る。月小夜ハ昔〻汝中ゆ金烏ゆ詈る紛を〻〻。偖ハ彼文ハ落散
く金烏ゆ据多るう。将他の者より差上多るう。何ゆ汝れ今更陳謝さるとも
よも許さく事ハわ〻じ。兼く刃の露と消んと思定め〻余なれハ刑るく
も何ゆ厭ゆ。さあれハ彼想人なり。思ハね濡衣と身ゆ被り。爰

実ゆ科ゆて刑せられゆハんと。我身ゆとうきくと罪深ゆ業なり。嘻是と
何とうきと多ゆ。汝ゆ言ゆ。苦悩の中ゆ歎ゆを重多る茲ゆ猪
尾ハ。狩猟の陪従として終日疲労られ。侍所ゆく疲と休く居多るゆ
遠〻く近侍支り来り。御前ゆ支ありて急ゆ召ゆ疾〻参ゆと紛せハ
くゆ。猪尾驚ゆ退取カして呼使より先立金烏ゆ面前へ支到り座
ゆ着間を待ど金烏声ゆ立春衝ゆ我最ゆの月小夜と密通せ
ゆて。你ゆも兼く中ゆ。如く彼春衝と生ゆて支の妨ゆ多ゆ切
て捨んゆ。渠奴教度帰京とめども刻を餌ゆ絢ゆ。今此淫婦と
奸通せ〻支露顕せ〻と幸ゆ。你追捕の者と従て渠ゆ宴舎へ弛行
有無ゆ言ずど搦捕て来れと。苛て下知を伝ゆ。ハ猪尾承り。各〻敬
ど座と起く。四の侍所へ支り。追捕の者と呼集め其身も武具一編て

春衡が客舎へ向ひ給へ暮過る頃なり是より先に宰相春衡の金
瘡全く愈給へ今は故郷へ帰まゐらんと金烏に暇を乞す数度の使も金烏
い春衡と帰らせて百俵岡沙鳥岐怒江の城を素落したる春衡が間諜と
導し故なりと沙汰せられんずと厳ひ左右に責よせく抑留給ふに心あらんと
も中野の城中なる客舎に日を送り給ふに此日申剋ばかり日来春衡と入魂の者
より書面を以て何事なるまじく俄に金烏が下知として猪尾呂捕に向へよと告
越給ふを春衡大に驚き身に犯せる罪もあらざるに何の為搦捕に来るぞや
更に其意を得ず密なる御使者の所為なるべし猪尾が来るを前に金
烏が面前へ呼び陳謝せんと言給へと御堂岩彦大に制し是を抱き閉に
故より危き御身なり小僕は金烏が人となりを見に勇あれども義なく已
と矯り能を妬む小人なり無益に呼朝の御より情なく君を技倆に此館に留
居候御郷と告奉とも左右に責寄て抑留る心に一物有と覚る按ずに百俵
沙鳥怒江の間道を引路しなれと已二人の智略のごく世上へ言繕り君
の手引に去りし義を隠し包むを以て推量れば君を人ならぬ害なく人々と
塞んとする奸計多く猪尾が征兵に向ふも深く子細ぞ有んと彼
猪尾に縮侘を以て無に取入出頭良くもれども武道に於ては恐るに
足ざる敵なれば君と終に進散さんを易しと無敵の城中なれば絶なる
道を乞て只征兵の間へ出る内に君を後門よりさりげなく城
外に出如何して故郷へ帰りの小僕と其間防戦射て欲と食留べし
と甲斐〳〵しく練めなれば春衡も理に伏し曰く汝が練め理の至極也
然とも汝一人を残し我〳〵鈍〳〵と落延んを本意にあらず我も伴に当
あく変叶ぬ汝と同じ枕に敷死をすべしと言に出花表又練べきは是さと

御無用なるべし。死は易く生は難し。今此城内の尾と肆しるは所謂大死也
何の益かいまだ只生を全し。當今の御大事は命を抛ちまことに人臣たるの
道なり。長絃義の時移るべ征兵向ひて千悔なりとも益なし。疾速
まことに急ぐ。客舎の門を須て猶之なる春衝を強て裏門より落さ
其身は弓箭を操て門の屋根へ上る。征兵まるべ一箭射んと待居る
却説岸根猪尾は人夫と集る間日時うつり日暮て春衝が客舎へ
押到るは十月十日頃の月さし出屋根の上は春衝が郎党岩彦小昊
足は身を固め弓矢手挟突立居る猪尾斯と云るより吉高く主人金烏
公春衝は御不審の筋有る。我は召連れよの御支なり身は覚ふ
んぬ。御前へ参り陳謝せば支障なし。無るは你美吾も紀さんとて拒
敵せんともるは火は入夏の虫はひ〳〵己と逆り死を求るは又愚なり

やう〳〵慮りて春衝は勧め我と同道。御前へ伺候せしめよと呼りけるに
岩彦呵〳〵と笑ふ。佞奸阿諛の匹夫多く言ふ勿れ。さる紂の飼は小児も
紂得べし。你が主の金烏。縁者の紂と幸は我主人を搦捕刑戮せんとする
る雖ども知ざるん主人は只今出て你は鏑矢を振舞ひ我。我先所持
の大和鍛冶が鍛ひたる矢の根は金味とんを屠と言より早く能響て猪尾
と同ぎ兵を射る。猪尾早く身をひるがへし矢を避。猶も奴が狼藉ふ。先渠奴
う〳〵搦捕よ〳〵知るべし。三十余人の追捕の者一斉は嘩と喚く弛寄る。岩
彦矢継早は指とり引絞ぎ〳〵小射下る。月を冴て頂を近し。あと矢
たる〳〵群がる兵卒。肩口腕骨を射れて〳〵蹌踉し互は尾ごうて進る。
こう。岩彦は矢種尽られ弓投捨て大刀振〳〵屋根より飛り地下へ
と喚く勢の中へ〳〵入當るを幸ひと軒を辷る是大力風はまこと〳〵征兵

いよ〳〵れを立られず猪尾大ゐに怒り。欲ハ一人なりとも退取るべて生捕ントまをして
下知をるゐ所まされ殘る者ども八方より切進む。岩彦心ハ剛あれども其身金
石なれ共ぶれハ殺ケ所。痛手を受終ゐ乱軍の中ゐ斬死〳〵多ハ通鳴呼乃者
よと眾兵是をとゞ咎ゐ多る。猪尾ハ春衝ゐ出ざるを不審。兵卒ゐ下知〳〵
門を打破せ走ル入〳〵ゐるゐ。暗き内ハ暗〳〵物の黒白も弁ざれど。百佑ゐ進
〳〵得ゐを松明をとり寄ゐ勢ゐ〳〵限〳〵と尋ゐるとも。人有とも弁ざれば偖
八裏門より搦手へ落行〳〵ゐんと。後門の監卒ゐ春衝や来ゐ〳〵と問ゐ日暮前
ゐ城外ゐ用ありて出られ〳〵と答ゐ猪尾足ゐ〳〵。手延して風を飡ぜゐ安
〳〵ね疾退蒐さ〳〵搦捕よと。士卒を引連城外へ出八方へ人を多〳〵遣せ給れども
早何地行ゐ落ゐ弁ざれば皆手を空〳〵して立ゐり斯と報ゐるゐを猪
尾も絶方ゐ。手負死人を検め岩彦が首をとり〳〵。金烏が前ゐ出恐る

〳〵度の結末を告ゐれば。金烏大ゐに不興。猪尾が忌りを散〳〵ゐ叱り〳〵
長良牛尾を呼出し春衝追捕の義をゞ命〳〵ゐ

金烏暴悪刑 碎妻妾 埴雅明恨金烏

再説大伴金烏八月小夜を牢獄ゐ繋ぎ居せ。其翌日牛尾が消息を待ゐ
午時過る頃牛尾登城。八方へ人を多〳〵搜し求ハ春衝が行傍ず
いとゞゐ。金烏大ゐに怒を矢ひ。此上ハ女を手ゐ刑罰ゐ行ん〳〵。城内の廣場
ゐ深き坑を掘ゐ士卒ゐ命じて多〳〵の蛇を捕ま〳〵せ。件の穴へ放し入偖ハ
丸の槽乃上ゐ席を敷く酒宴の杯盤を並陳ね自〳〵側室侍女近習ゐ
を従〳〵席ゐ着頓て大ゐ酒宴と開き。鯨の〴〵飲虎の〴〵飡ひ。稍酔を
発し頃令を傳て月小夜を曳出させ。情なくも衣服を剥く裸にし。坑の中へ
突落さるれば。憐む者し雪より素き玉の肌纖〳〵る手脚も。ゐ〳〵乃

蛇倦つれ締苦しむるぞ。月小夜の只小喚び地小叫び煩悩苦悩小堪ざる有
さま。十悪五逆の罪人の阿鼻地獄小墮落し。紅蓮の氷小閉られ或焦熱の
焔小焼と。呻喚大叫喚の苦患と受る。是小八争り勝負れと。彼嫉妬編執
の側室ども。始の程八快しと。京小目と合く笑と含くるぞ。今群蛇月小夜ガ
手脚とうゝ首小巻付苦しむるとうく。身の毛竪毛孔寒くうるふ恐ず面
を背く顔色如菜。まして恨あれ侍女近侍ども是と嬉ゝく涙と流し。身を
背け耳を押へ戦慄むうなり。彼ども金鳥八快げ小笑ひ楽。大盃と把く引
請て。数杯と傾け大小醉く。高欄小倚りて左右を顧て。白昨日まぐハ羅綾小
纏れ八珍小飽し身も。不義奸通の科身と責て斯のごゝ。是自業自得と
雖小くも我眼を開く者八彼文を以く手本とも。ぞ未期の水小換く秘滴
を酒ゝて飡せよと令まるぞ。刑卒仏来り。頓く酒を煮沸らせて坑へ
酒ゝれ八蛇ども熱酒小苦ゝて上を下と反し月小夜の肌小噛付咬入れ小
ゝ雪の肌血ゝ小染く紅井小変し。虚空と抓く躍揚り七転八倒して
苦く叫。声八。諸人の耳小鼠と貫ぐく。情あれ刑卒まぐ。月小夜耳を
押る斗なり。斬く漸く小苦悩迫て叫声も冬野の虫ゝ小弱く終小阿
死小死ゝるハ悲慟なるる最期なるる。金鳥指揮して死骸と取出させ蛇
を城の門小埋殺し。骸を城外小肆しるぞ無道なる。然小月小夜が兄垣ノ
雅明八我妹ガ蛇責の刑小行れ。骸八城外小肆るとて街の辻辺小ゆく大
小ゝ小怒れる忍ど其場所へ支行群集の人の後より伸上りて。きも芙蓉の
孝も眼狗上歯と咬め。焼ゝ肌も朱小染く。同もあてられぬ死相ハ
膽落魂消る心地し。怨歎の涙滝のごゝ。人間も蛾ど男泣小泣くるぞ。斯て果
ぬれ文ゝねど我妻を主飯り。老母小有し子細を語ると小ぞ其侍苦と

金烏

金烏が残怨
愛妻月小夜を
蛇責にする
圖
月小夜

叫び氣を失ひて仆る。雅明はやうやく急ぶ田生丹を服さしめ抱き入れ枕
に凭せ暫時むりて有て息吹返し涙を流し紅涙を袖に濡し
是より飲食も付ず昼夜女の支を言侵けて且暮泣怨て終に七日目に
泣死しなんとぞ哀れなる。雅明は重る不幸に手脚をもがれし心地。怨恨を噛る
物なく身の薄命を悔て嘆るが浮き老母の亡骸を野辺送し母と妹が喪に
こもりて中陰の佛事を営むに付ても金烏を深く恨み怨骨髓に徹
す。如何もして母と妹が仇を復んと思へども領主の権勢とり九州の鷹
あれ強将なれば輙く討ぶ。何卒渠が身近く奉公し油断させて寝首
を掻んと是より專ら金烏に近寄て便りを求めける

雅明療牛尾児并雅明仕金烏

茲に金烏が長庁菊地牛尾が愛子此頃異しく瘡を患ひ医療を尽せ
ども驗なく。日を追て疾病となり終れば牛尾大に患ひ普く医を尋るに
垣の雅明は若年なれども一医術に精し由告る者あるより牛尾心中に思ふ若
輩なれども村落の竹医爭よく療ぜざるを思ども先試に彼が病論を聞
て使を以て雅明を迎へ入る。雅明思ふは彼牛尾は金烏が重臣にて
勢強し。我を招く社幸ひなれ彼に対し金烏に奉公を願
便を求んと即刻使に同道して牛尾が邸宅に到り引路の侍女に導く病
床へ通す牛尾に寒暖を述昇く後小児の容躰を熟と窺ひ脈を診へ暫
く黙然として牛尾に對て曰若君の御病は本日本に無き所の病にて是
を漢土にては豆瘡と又疱瘡とも云せり不佞が祖父は高麗國の医生
なり。此豆瘡を療ずるの方種々に書傳へ小生も祖療方を年へ久し日
本にも病症あれば其方を用ひるのもなく益の術と思ひ珍し

病と若君の患のふ依祖父の遺方初く世ふ出いたり此病恐らく倭國
の医所ハ療ぢる方と知ぢ。余人ふ委ぬ必ず瘡毒内攻して死ぬべ
御領内ふ生ありて十死と遁れ難し。
も往古より有ふあるぢ。後漢の光武帝建武年中ふ南陽の虜と征伐有
り時虜地の毒氣ふ觸軍卒多く此瘡と傳染して患ゆ。中國ふ始
て流行ぜると謂り。故ふ虜瘡とも号。又天行病ふ比れど天瘡とも号。又幼
ゆより老ふいたる迄一度病者ハ再び此瘡発さるる事なし。百歳瘡と
も呼其形豌豆ふ似たると云。豌豆瘡とも称し其色の
赤紅を貴び紫黑なると忌ふ。此瘡ハ自余の瘡と異ふして三日毎ふ一変し脛
紅症ハ三五十五日ふて大既治し。重九ハ世日五十日も長びき難治の症ふいたり
てハ扁鵲仲景と云ふ名医ふ救ふと雖ども豆瘡の順逆ハ病者てより序

熱三日見點三日起脹三日貫膿三日收靨三日以上十五日なり。若君の御豆
瘡ハ先恒例方ふて日順ふ見ぬ已ふ出脹ふ至ぬ此三日の間殊ふ大変
なり。ゆゑ精力虛弱なる時ハ十分ふ豆瘡発ぬ難し。又純毒ぬ瘡毒内を攻
て必死ふ及ぶべしと。斯や世人の諺ふ廣言吐と思食ぬれども。我家ふ
傳し薬方の強と見ぬ事なり。頃て薬を調合し。雅明ぬ煎じ水煎と病
者ふ服せ給ふ。牛尾ハ雅明ぬ病論を出て一度ハ感じ一度ハ收ぶべしと頼母し
く思ひ給ふ。さるぬ雅明ぬ対ぬ給ふ。薬力の強ぬ見えて豆瘡十分ふ発し面
部大ふ腫上り給ふ。病児ハ煩悶をなる事なく寢ぬ中。牛尾此体と
見て大ふ心を安ぬ。雅明と共ふ所如其の通ふ信じ給ふ。雅明ハ愚ふ昔あれど病
床を去ず。昼夜食事を解ず治療ぬ尽ぬ給ふより小児ハ漸ふ快覆し
瘡痂て次ふ痩落て平日の如く迷惑ふ小なりぬ。牛尾ぬ婦ぬ者

子の一金と拾ひ〻く悦び雅明が功を賞し多くの謝物をとゝ与へる
按ずるに本朝に疱瘡の流行せしハ天平七年の春筑紫より始て
異しく病を傳染まつて流行て上は侯より公卿大夫庶民に至る
迄も此病を患へ夭死する者多くして諸史に記したり牛尾が小児の豆
瘡と患しハそれより七十余年以前のものなり此病筑紫に其頃より稀
に病者あるとゝも都へハあゞ流行せざるも聖武天皇の御宇に始て
流行せしに由記せしまゝ和名裳瘡とも又ハ伊母とも以て
雅明ハ是より度に寄て牛尾が方へ立入て巧言を以て牛尾を再
難得者と思ひ疾者あれば必ず雅明に委ね何年金烏が医官に勧めて立
身させんと思ひ先雅明が心底を試しんと金烏に仕官の事を言き聞せ
るに雅明もとより本より成れの時節到来せりと心中大に悦び謝して曰

臣に殿の御厚志何の世に報じなる事成べし実に小生も村落の草
とも木に朽果んものを朽惜く思ひ何ぞの緒侯に仕官して父祖の名
を顕さんのみ。年来此度を祈ひき。然るに妹月小夜と申者大
殿の御目鑑にとり奉りて二あれ出世せしを友其縁に付て大殿
へ仕官の義を願ひまうんと思ひ居ゝ豈斗人妹義不義の罪と
犯し御刑罰に行れし度己が罪己と亡ぜしかゝ。凡が死ハ悔むに足ず
いへども小生が雲の網断果を世に本意なく歎きいなり。殿の御
吹挙に大殿召抱へ給るものゝ。大馬の労とも厭ずに御奉公仕
りし甲斐に罪と犯し刑戮に遭し者の縁と小生あれば与に抱へ
の人ごとに牛尾頭を振否主君金烏公ハ大度の人あれば些細の
義を念とせずとあり。依て金烏公と恨む心なんで我主君に勧て

你と仕官せむ者とりかすぐ。雅明起く赤面し。即座に天神地祇に誓
ふ。又一紙の起請文と書指を刺く血判し牛尾が前に出くるなり。
牛尾も疑念と晴し。其日は雅明を飲めし。其後金烏が撓嫌と見合し。雅
明が医術に精く仕官の望有よと語る。召抱ゆつば自然の役に立べき
者なりと勧めるしば金烏は心中に巧むを有る乎一議にも及ばず召抱へん
と紙を認ふ。牛尾帰びて城に雅明を呼寄。斯と言はせるに。雅明
仕まるべしと喜び牛尾が息と深く謝し。月見とて遂に金烏が手廻りの
醫師となり。事く金烏と紂の妲己を霊に透をぞ覗ひける

九霊殺妬婦 并 金烏懸想嫂

且説金烏は奢移淫酒に耽るのつけ。己が領地の治に足ずして。何
事も家と押領。九州の探題となりて威を鎮西に震へるものと。内々紂

を唆めて延に牛尾が雅明を勧る。然るに究竟の妻と見を紂に召抱る
と。岸根猪尾練るは彼雅明は月に夜が兄に成べし。其仇と報ぜんとの
仕官を望ませ。も者なれば只後の患と除くべし。斬て捨ると奮ふ。金
烏嘲ひて。何条さる大志と抱く程の者あらんや。渠已に神文に血判し
き出せしは己が栄利と希るるなり。何ぞ妹が仇と復さの意あらん。やや
害心ときしそむるものの知らる者捻り殺さは安らかん。渠が父祖は高
麗國の医師なりしあれば奇業の方との傳授まるべし。我見と用ゐる時有
とて。更に忠悍る体もなくれば猪尾も已を甜く再び言も出ざりける。然
ば雅明金烏が身近く仕へ巧言令色と以て表は阿諛。内心は寐首と稜
んと窺ども。金烏は用心深く。夜は側室侍女の余に男子と近付ざ。昼の迫
習ひ次房に直寓させ少しく眠り忘る者は厳く罰し懲るなり

其字を厳重に敬て近寄ざる。又毒薬せんと思ふとも疑念多く性あれ
む。湯水酒食とも再三試毒させ上るゝでハ用ひざる度毎も怪忽〻まを
ゝ〻ぐ。独心と困めり。茲に彼月小夜と罪に留せ五人の側室ハ夜に
なれば廊下泉載あどに寂〻月小夜が有〻ぶの姿に丈ある黒髪で脈
乱し。髪色青ざめ満身無に傑く立居ると見る度毎に仆
仆く怖ぢ惑ひ或ハ氣と失ふも有れば金烏に此事と告れども大驚不敵
乃金烏物の屑ともせと。何条さる事あらん。你ハ心に恐を抱くが度さしも
あれ物ずく彼女の姿に迷るなり。乃恐魂陽土に残ぞあるぞ我眼に
遮るぞ。れに其事すあれを你が心の迷ひなりとて敢てとりあくねば。側室ハを
せん方なく已ぐを丙舎へ僧と結ぐて月小夜が跡を吊ひ或ハ修験者と招まて祈
祷あど残なき亡霊の障碍と穣れとれども露なりの験もなく。丙舎の

偶庭の面に月小夜が亡霊現れ出るが。五人の中に頭どり〻関路とり一
女或夜廊下の曲所に〻又月小夜が姿と見れば叫ぐ尻居に仆るに亡霊を
関路が面と眼〻げに睨る其怖〻き様に物なく是より重れ病を患ひ
昭を乞く親里へ帰り種〻医療と尽せども強なく全身に怪〻れ瘡を生ま
其疼〻毒虫あどの螫ごとく堪ぐ。折〻熱さて煩悶。噫苦〻又蛇の
喰付ぞ迫てよ拂てよと繚乱を吐段日苦〻悶く遂に狂死〻る是を姑
〻残る四人も同じ奇病を患ひ近に蹀死〻る死霊の祟ぞ恐れ是偏に
隠悪の報なり。慎む者ハ嫉妬なり。金烏を五人の側室〻〻〻死亡〻る
中に又遠近に美婦と尋ぬれば求め側室に〻〻〻ぐ其心に十名叶ひ女も
あらざれば。おれ突顎ナれ女もなるとおもひ処に金烏が金見大伴馬来田八百伴
國在陣の留守中に其妻病死〻れば飯國の後豊前國文屋廣嶋が息女

月小夜の亡霊
如蘭笥夜
月小夜か
きいえ
霊魂ホ
ゆきさるく図

芙蓉とゝくるを後妻を呼迎るゝ。此芙蓉容顔美麗なる上糸行の調妙
なるを勝るを負操正くよく夫馬来田に仕れば馬来田が寵愛大
なゝ程なく男子出生し名を金道丸と呼夫婦掌の玉乃ごとく鍾愛
深恩に生し貢く。敢て一門の車に逢せざりし金烏ハ〇〇く芙蓉が容色
小心を以て暗に憂慕とのゝ嫂あれど奈何ともなく。其侭に手を経此頃
去る忌る〇或日舎兄馬来田が使者来て明月主人の誕生日と中金道丸殿の
誕辰に当り残なく一門縁体の人々祝賀の野酒を進せんとの義に金烏
公に〇〇〇〇御兄弟の御使者に対し労を厭ひ〇〇〇〇来駕なしあるべきの義に
いと述べを金烏許諾し明早朝より仕候まゝ〇〇〇〇と言て使者を返し祝の
禮物を調へ翌早朝より岸根猪尾をむすめ若干の従者と引連馬に跨り
臼杵の城へ到りくれば馬来田は〇〇〇本丸の客館に請じ自余の一門も遅く来り

〇〇〇〇頃く大に酒宴を催めし山海の珍味と調味し善尽し美尽して
饗應し妻芙蓉を呼出して琉球琴を調べ〇〇〇〇ふり嬌態〇〇〇〇
花のごく。婉娟る柳の腰細やかで。月も閉花も羞る斗の佳人多上其声
〇〇〇〇頻迦鳥の勝り凡音〇〇〇〇妙なれば一座乃軍心耳を澄し感賞せざるハ
なし。中に金烏を面影忘れ〇芙蓉を久〇〇見以前の憐惜まゝ〇心に
萌し〇あれ此女を如何にして我国の花とせんとの心中に悪念を生じ〇〇〇〇
鮮と色に露さぬ。数杯の酒に八九分の酔を帯び。馬来田に向ひて曰。家兄
八弓矢神の冥慮に合の〇家に倒れ九州の探題職を許され世継乃
男子とき〇儲なき〇〇を芽出度〇〇〇〇甚り兄の盛運につれて中野の城主
となるゝ〇〇面目身に餘る迄も政務繁くして未だ祝賀を嗔〇〇〇〇
なく。頃る本意に背く。来る八月十五日に祝賀を表する為に其月を

賞しぶてう。某ぶ家城ふく野酒一献さ〜上ゆさん間列位く倶家兄も光ば
あ〜めう〜んゆと言ふれば馬来田収び滅ふ你ぶ一城の主く成〜ふ。當家の強
ふく我も満足せう。祝賀ハ振舞あべ万事を拋ち出席を願〜と結い
ふるぶ。金烏も収び。又酒宴と感ふ〜。主客酔を尽して。夜も深更ふ及び
ふれば盃盤と納め。衆客王ふ別を告銘〜己ぶ多〜ふ帰宅ふり

金烏毒計弑親兄　亀山太息計牛尾

大伴金烏ハ家城ふ帰りて翌日月囲鶴嵩の城主佐伯連男ぶ紆へ使者
を立べ急ふ密幾と命ぜ義あれば来賀と乞ふ〜言せられば兼て大友皇
子ふ一味連判の好ある連男。承伏の旨返答と使者と反〜。其日中野の城
へ到りれば。金烏是と迎ぶ閑室へ請じ。人を除ぶ只二人何事ふ有ん密談
数刻ふ及びぶ後。佐伯ハ鶴崎へ帰りる。斯ぶ程なく八月十五日ふもあれば

金烏ハ客館と家ふ清め山海の魚鳥珍菓と集ぶ郷食應の儲を調へ。
臼杵の城へ招請の使者と立ふるふ。契約なれば大伴馬来田。枇杷亀山太
息と首ぶ〜月勢数多引連其身ハ素典ぶ中野の城へ赴ぶ。金烏を
岸根猪尾と半途ふて出て是と迎ふ。城内へ請じ客館へ通ふ。内
佐伯連男も来りれば金烏又是を請じ王客三人の余ふハ他の二門ふ留て
ザ〜むど頓ぶ盃盤を運び出ふ。酒宴を勧め。馬来田ハ亀山太息ハ
下の単と佐伯ハ家士ハ別席ふ。猪尾雅明両人ふ命じ給侍せう。斯て
客館ふハ酒宴稍酣ふ及ぶ頃。夕日も暮ぶ名月ふ良夜の月東ふ山
ふ出。其夜ハ殊ふ一天快く晴ぶ一片の雲もなく兼て金烏ハ物好ふて
奇石珍木と集め〜鑒山泉水の風景心紛も及ぶ紆ふ造設たれば月
も一ふ面白く。馬来田連男大ふふ興ふ入まぶ〜盃と揚酔を催を中ふ

馬来田は大いに酩酊し席上に打伏す。金烏打ちこれを見て少しの酒に早く
酔ひぬるよみいで醒しの妙薬と進ぜんとて一箇の瑠璃の壺を携
出す。是は百俗國に名高き福信より得たる亜丹なり。奇効多き中にも殊に酒の
酔を醒すの奇妙なり。先ず一用ひの酒を醒して今一盞傾けのべとて七に
なる小童に与へ給ふ。馬来田何心なく是を服すれば香氣あり味ひ甚
だ甘美なれば実も酒酔の醒るべきと覚え起あがりて金烏に謝せんとする間頻に
嘔吐の氣味出でんとする友揆端に向ひて吐くに腹中焼るごとく鬱々血
を吐き岡苦して其侭に仆伏す。陪酌の侍女近習们大に驚き騒ぎ金烏制
し是薬の瞑眩せしなり。此侭に寝ざせ置べしとて猶己が佐伯と酒を酌合
近習に命じて亀山太息と招かしむ。此時太息は別席に饗宴を受ける
ぶ元来下戸なれば滴糸だに飲まざるに酔ひどもに到ざる処に金烏に近侍
きまりて主命と述続ひ来るに亀山是に引きつゞき客館へ入る。遥来座に
平伏し来るを金烏近く招き寄佐伯と顧て曰此亀山を大伴家累代の
長たるにて当時の太息は武道の剛の者なり。恐おれよとこれを。偖太息
に向ひ我兄は酒量浅くして早く酔伏せり。你我同じせまとそ壁ぬ乃大
觴を把て太息に太息唯と答て頂戴し扱ひ申す。愚度は下戸得
下戸なれば酒は滴糸賜る者と辞し来ると金烏糸さぬ。豈一盞斗は
飲れざるべきや有とて手づから漫くと感ずるに太息は用ひ果ぬ。金烏が
酌なれば奈何ぞ辞ぜんと面を皺めつゝ是を呑干すに忽ち面赤き手
脚まで紅に染る如くなりぬ。金烏大に驚き緘に你は下戸なり。強て離酒の
霊薬と与へ給へとて。坐前の壺より丹薬を七粒出して与ふる。太息両手に
押戴き是を服するに香氣高く味ひ甘く口中清しく成ぬ。拝謝して

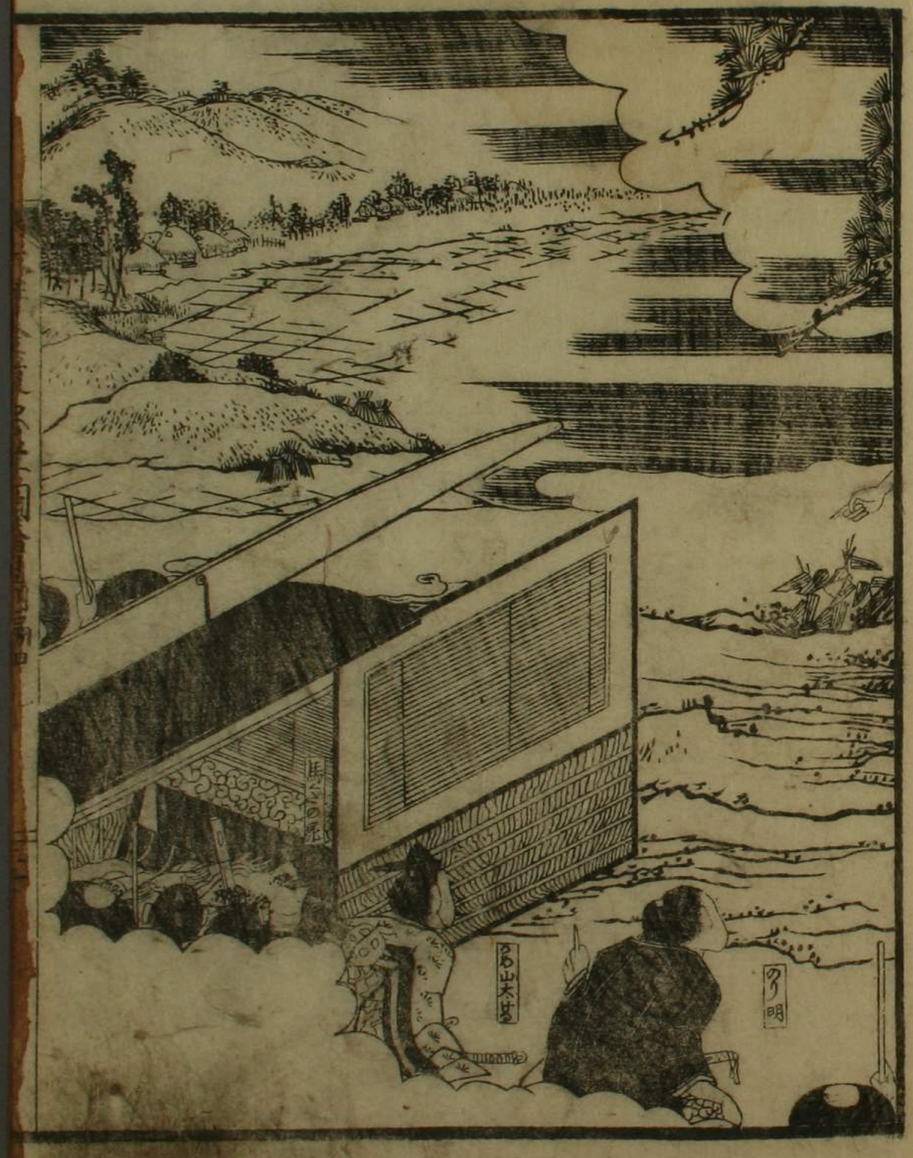
息を窺ひ主人醉伏くゐむ御睡濃くに愚心扶起して飯城仕る爲しと
ゆゑと金烏制しさのく深く用ゐられ非ざれど程なく醒めん你は旧の席へ
立つ膳部を著いへとりまど太息せん方なく金烏佐伯を辞して以前の席
へ立つるを頻に心下ろく五臓熾るが如く嘔吐きぎくるゆゑ堪えて
座を起れむ垣の雅明見て介抱し人を室へ扶け往るを太息は早嗅
と仕まつり鮮血を吐く悶苦むを雅明殺生と急に懷中より一茶を
とり出し口中へ含め水を飲せ背を撫腹を摩ずれど太息よく正氣
ゆゑ人きと覚めれる猶身体痺く自由叶得ぬ両手とうて喘ぎ居
る雅明を低して曰御身金烏が前に猫鴉の壺に入る毒茶を
呑めやと問亀山君おろて如何も醒酒の霊茶なりとて金烏公よ
り其壺乃茶を賜りし友我見て服せりと答雅明歎息し猶声を低

て言ふ我実意を公に告ん間必ず変に逆りゆゑ彼茶は我家に傳来
せる鴆毒なり金烏に製して与へ深き子細あり小生に一人の妹有
し代金烏が側室に奉公させ此実の罪を咎め苛き刑罰に行ひ
故母は見て歎き怨て日く死亡せり然て金烏は母妹を仇あれ近寄
て仇を復んと牛尾を欺き彼が吹挙にて金烏に仕官せり然るに
軍用の料にて秘方の毒茶を求る由已変を得ぬ製して与へ此奇
茶を服せし者は一昼一夜の中に必ず死と豈たゝんや軍用のみにあらず
して馬来田公及び御身を毒害せん料なりしかれども我家に毒茶
を解する妙茶あり今御身の死を救ひ即ち見なり悼み給へ馬
来田公なり毒茶を服しゆゑ時刻に侵て解茶も今は救ひ
此暁に必ず死ぬ他を復さんと志ゆゑ却て金烏が

本家を亡されし人なれ。夏小逸りまあくや此義なり。只時節を待小生
と心を合して主君の仇を復しまへ。去り乍ら今夜毒小中て敢心せず体
ふく只管繕語を吐。食へと覚ぎるでくなり。我さえ小計ひ進ぜ
と言へば。亀山安度毎小大小驚られ。それで社今日の饗應其意得ざる
事多くしも理り。金烏くる毒汁と云へば肉身の兄を殺せでを無道小
と。御身の行ひでく。今客館へ斬入るも。金烏と対人支難くる程。教の如
く放心せ。体ふく今夜の難を避。後日小主君の仇を報ぜ程。久もぐ御
身の深情と忝なれ。猶万支頼入けと示し合し。雅明の肩小くもて
旧の席へ立出故意と席上小仕ま放心のでく頓小饒言と吐れば。猪尾と
もぐも佐伯ば後者も。見へ如何して囲くくち。近侍一人支ま来り。御客人
小両公とも酒小酔へ。御系典と客館へ帰来ま。よくの仰なり

疾くと急ぐ程。両家の供廻り絡く主従系典と客館の敷基へ帰
行ふと。近侍仰手帰小て奥へ帰入。馬来田連男を呼て帰出嬌夫小
こくし。両家の従者ハ主の系物と守り。勢揃くを出ま。雅明ハ正体小
元亀山伏扶く後小引添。佐伯ば系典と東へ帰往。馬来田ば系典ハ西へ
往。已小四五丁過る処小。俄小東の方小大勢のひしめく声聞へ。大小騒動ま体
あれハ大伴の従者ども何ぞ小やと紛るうち。系典を呼ま呼り戸を引あけ
くを出るハ馬来田小あらで。佐伯連男なれば大伴の従者。月影小真面を
見く。見へ如何と問果く。佐伯も驚れ面色小て。偖ハ我既酔へ大伴公の
系典へ系遣くと覚へり。其ハとあれ東の人者を心得ぬ。你達も未だ
して地行小ぞ。大伴の従者も系典と捨置く一有小東の方へ蛇到り尽る小
佐伯ば従者ハ皆刀と抜くもち。曲者ハ南へ走りぞ追留よとの上も有。小乃方へ

之はい
杆杆と肆ふ
して
金烏其兄
馬来田と
毒害
害の
する
図


月山大生
月明

往ーごと牛群も有く。東西南北へ立隠ぐ最中カ。佐伯ハ鬼者ると其侭
糸典の戸を引開るを。嫌む亀ー馬来田ハ鳩尾を短刀ふく刺貫れく死
ー居ら。連男琴ゑ化ー体ゆく。何者の所為ぞや敵の面体ハ見とめざるやと呼
ハり乱れ。佐伯の従者ども此声を聞く再び琴ゑ化。主君ハ安躰ふく在とよ
ば曲者ふ対ーハ何人ぞと訪ると連男制ー我も馬来田公も酔ーく
糸物を糸遠へーが。むゑず此孫ゑふ及ぶ。何ふまれ中野の城へ此変事を
告ぎ来せよと従者と走ーせ。偖残る者ふ支の顛末を問ふ。何者とのまぼ
二十人絆の覆面せー者。不意ふ起り立て糸物と取囲く抜連切ー懸
ー迫る我ー も技合ー戦ハ乱ー ふ物の中ふる主君と対已ぎ多く逃ぬ
ぬ馬来田公とハ勢ぎ多ぬ主君対れ多ーと思ひ退行ハ早何地へ
逃失ぬと絡ーー。大伴金烏ハ家従菊地牛尾と倶ふ馬ふ鞭ち来ー鬼来

垣の雅明も亀山と下僕ふ守ーせて此所へ付着ー。金烏ハ馬より飛下
馬来田ガ死骸を見て大ふ驚ー。是ハ思ひよらぬ不慮の大変ー。
の孫ぞふ亀山ハ如何ぞ合ぎるやと問ー。雅明進ー出。亀山主ハ酔ーー
ー友ふ。狂人のごと多ふ死譫言のー吐ぞと覚られぬ体ふ見ぬ小生是と
ハ抱ー。彼人の邸舎まぎ送てんの。下僕と倶ふ肩ふ付ー糸典の後ふ付
ー往所ふ。強ー人音ー。佐伯ぞ化ー大伴家の人ーも東へ走ぬふよと
何ー ふやと。驚る化亀山主ハ下僕ふ守ーせ付着ていとやと。金烏大ふ怒り
小の酒ふ食ひ酔主の対ーと知ざる白癡連ー。其をさー。五兄ー
者ハ佐伯氏ふ遺恨ある者ぞ。怪ふ佐伯氏の往進ふて。糸典ハ
遠ひー友連男を難とのれ。我兄ハ人遠ー。非食の死ておせー。武連ハ
拙ぞ。ー。遮莫我息の右ハ恨ハ兄の仇と草ぞ分て墓出ー。修羅の

を念と晴させやがて。佐伯氏は先駆城。彼曲者们を尋搜し手分をあらば
我方へ告知せのるる者。牛尾は我兄の死骸を守護して臼杵の城内へ到り事
の変を告ぐ城中の者の騒動せざるまう取鎮よ。雅明は亀山を扶て彼が私
宅へ送り得させよ。遂に指揮しなふ。衆人承諾。佐伯は別て告て鶴
崎へ駆り。牛尾は馬来田が死骸を乗物に引添て往雅明も旧の所へ駆り
正躰なる亀山を扶け牛尾と倶に臼杵へ赴くなり。金鳥も中野の城
へ引取なる。斯て牛尾は門勢を励し路を急ぐに。已に東雲近く所々の雞五更
を報ずる頃臼杵の城に近着なる処。今まで正体なく足年亀山太息忽ち太
刀を晃と抜よと云る間もなく。先に立る菊地牛尾を。後加衣に斬下ど斬れば
さしもの牛尾一言も發せず其侭に仆る。牛尾が家人も是へ如何と周障す
るまに。太息は逸足にて何方へか落行れば。雅明大に驚れるが如何なる

所存ぞ有と見も其場より逐電し。牛尾が家人を主の敵を討留んと亀
山が跡を追行なるに。大伴の従者は二度の騒動に惑ひ足早に城内へ赤
物と帰入長に搦の白虫に有し次第をぞ告ける

搦白虫干女主吾遠計

定めなき人間の死生に。昨鳥なく九州の探題職と諸人なる敬し。家乃
繁昌世に時めき大伴馬来田不慮の横死をとげ。大伴家に一人當千乃兵
と頼切なる亀山太息さへ其後より行方知れなかりれば臼杵城中の諸士は
只暗夜に燈を消盲人の杖を失し如く忙然として。如何にかはりゆく世の中とと
あやぶく思ひねばかりなり。亀山と門列の臣搦白虫と云ふ太息に劣ぬ智の男
乃士なりなるが。馬来田が変死亀山が牛尾を討し逐電せし條を聞て大
驚る死。今般の凶変殆と其意を得ざと必ず深く巨細有べしと思へども。思慮

を聞くを遅もかく。先主君の死骸を奥殿へ舁入させられぬ。今室芙蓉は
夢のと斗あ孩死て丙舎より走り出空〻紀夫乃死骸をうるふ。昨日立消ふ
粧ひ〻を出しふへ引替て髪乱れ色変じ心ふハ短刀を刺通し乃仮朱
ふ深くいと浅猿れ躰なれど。二目とも見ぬ死骸の側ふ泣伏天ふ叫び地ふ悶
声を放て泣れへ侍女近習其余の輩も皆號泣の涙ふ袖を絞らねハ無
り〻の白虫も膽消魂乱るゝ〻怨〻あり。氣を房して今室を練め御歎を
さるを〻ふいへども今ハ如何恨〻ゆ〻ても甲斐なき御事なり。當家の存亡今
此時なれば。御歎を止れ。若君の御身ふ〻を多〻ゆ。御用心〻を専一ふい。俱一
門の人〻来りも〻も若君の御病氣と披露し敢て雑人ふも逢せぬふる勿也
諸士も女〻紀歎を止殿の御骸を浄め佛間へ入するゆ〻と指揮し〻れ
諸士領掌し馬来田ゆ屍と浄め浄衣と著替て佛間へ〻入香華を供〻
霊と祭り白虫〻を諸士を集く評議し一門縁体の方へ使者を立て愛〻と
告知せられ。各作夫て白杵へ地集る内金烏も来り〻れ。列位大廣間ふ
列座し金烏ふ悔と述るふ。金烏一座ふ向ひ今度家兄の横死を我家城
へ招請せしより変起り。佐伯〻奈興と奈ふ遠しより人違ふく変死せ〻れ
事宿因の為ふ成るゆ。我残念いと〻分ふ。さもあらば九州一円
ふ草と分〻尋捜さむ。兄の仇を捕得ざる変や有ゆ〻。ふり金道丸ある上
は是を家智し〻。我後見せず。大伴の名跡ふ於く子細有ゆ〻。列位も
日来の懇意を倍て。幼主金道丸ふ力と添ふる〻と言られ。列座の人
〻唯〻として感伏を是ふ依て金烏指揮し葬式の儲を厳重ふ。一門
城中の諸士棺槨を送り菩提寺金剛密院へ到るふ。金道丸ハ重
て母芙蓉是ゆ名代となり。葬送の行列厳ふ道とり〻を金剛密院ふ

衆僧種々の法事とかゝるぞ哀なる斯て金烏
坏不飯城して万寿と高議し門縁体の輩悉く飯宅し金烏も一旦中野
城へ飯り名れば何杵の城ふを緒士皆喪ふ籠り城中寂寥として高声ふ物
語まる者もなく唯其中ふも殊ふ哀れふえくるハ金道丸の母芙蓉の
方なり長なる翠の髪を鈴捨喪服を着袈裟を掛佛間ふ籠りく亡
夫の霊と祭り後生善所のあふ経を讀誦し瓜繰數珠の水晶ふ玉の
玉を貫くへく鉄の輦くゆもなく物弁へぬ金道丸が鈴の音ふ脳と覚し御
佛ふ供ぜし梵と唱へく愛交ひの子を見るも悲しく万ふつけく歎の種ふ〳〵ぬ涙
りなり盛るふ或夜橋白虫芙蓉の方の寵りし佛間へ入来り侍女ども悉く
遠避膝を進め声を低して言なるハ馬来田公不慮の横死なし御怨
傷の程察しまりい抑今度の凶変其意得ざる事多く熟考へふ金
金烏殿の心術より出さ事なるべし亡君先頃某ふ作るハ子金烏の大
友皇子ふ一味荷擔し我とも皇子の御味方ふ加担よと勧めるる我家先年
蘇我入鹿ふ一味し己ふ天朝の御怒ふもあるべきと鎌足大臣の寛仁ふ依て幸
ひふ罪を免れるる盛るふ又皇子御自立の企ふ与方せんと朝廷への恐有こそ
茅金烏と深く謀め承引せざるしと結りなれば是等の変より此度の凶変
ふ及びふなと察しふ処前夜亀山太息深更ふ小児を懐ふて某ら邸
舎へ来り密ふ然〳〵と義有よりふ閑室へ伴ひ子細を尋ふ此度の
変ハ金烏殿の奸計ふく佐伯連男と心を合し主君馬来田公を毒害し途
中ふく横死有し体ふ謀り我も金烏殿ふ毒茶を盛られ己ふ一命を亡ふ所
垣の雅明と云る医生のあふ救られく必死をまぬれ洋て狂気せし体を装ふ金
烏ら斤晩と頼む牛尾を討く立退られ飯城して緒士と評議ふ

叶ひ[illegible]れば胥く世を忍ぶく時節を待ち[illegible]己小金烏ゞ兄公を弑せ[illegible]る明
あれど朝廷へ訴く其罪を糾さるべきれども大友皇子金烏と鼎肩き[illegible]
歎訴を押へ妨げられんを治定かり並でこそ城中の緒士を坎く中野の城を攻金
烏と対んとすることも見さる勝利覚束ゆ。毫小も角小も主家存亡の秋小
く天運小任せより外小絶を策小。但し若君を其侭小置ちんを
危し。我ゞ隠妻小一人の男子あり。若君より三日以前小出せ[illegible]れむ若君ゞ
御身ゞ代ふせん為斯懐れ来ぎり。是を今室小進ゝせ若君なりと言觸し
真の若君八足下守護して國を立退。人ぎれど育上て御父の仇る金烏を
討せ大伴の家名を再興させまゝとや思某彼ゞ忠義郎の深れを感じ
小児を預り亀山を落し申りれた。太息ゞ[illegible]ゞ今金烏ゞ罪を糾ん[illegible]雖
れど亀山ゞ遠れ慮小従ひ若君を某小預り太息ゞ子を若君と[illegible]

[illegible]
[illegible]雖ひ[illegible]幸ふ若君八深慮小育ゆ金烏を先ゝ藩中の緒士も面を認
る者ゆれば金烏も疑ひ申。只人小俤ゞ[illegible]れ機密ゆ侍女乳母など
小も能言含め決して口外させ[illegible]ゆ面小縅心を表し策を示ゝれば芙蓉も
毎小歎息し。縅小亀山主と[illegible]御身の忠義を[illegible]嬉ゝれ主女も金烏殿
の心疑ひ。若君の身の上を[illegible]案じ煩ひ小御身連ゝ立退ゆ。妾又
何と憂ゝ[illegible]。もあれ御身此城を立退れゆ。金烏殿疑ゝを自然若君
の御身の大事小及ぶ変やあらんと[illegible]を白虫制して其八氣遣ひゆ[illegible]
思ゝ旨有ゝ都へ上るよゝと書遺して立退ゆ。邪智深れ金烏ゞ己が身の罪
と朝廷へ歎訴せんゆ都へ上り[illegible]あと推量り大友皇子ゆゝ密使を立ゝ
某ゞ歎訴を妨んと。却ゝ若君の美小心付ゝ[illegible]芙蓉聞ゝ心を安
んゞ。夫いゝも斗ひゆ[illegible]只[illegible]れ亀山主の和子あり。遂小八非道の金烏

殿のあふ如何あるうため遣くん亀山主ハ忠義のあふ子を捨らるゝ
られむ。其覚期も有ぬ。其母なる人の歎ハ乃程と思ひ遣く怨ゝ
とて落涙ゝ〻と白虫練めて御悔ハ理りなり。何ぞも御家の為なり長居
仕ゝ〻ぐ人の疑ひを引出ゝ〻ぐ夏の妨となるべん若君の御衣服一重賜りい〻彼小
児小着せ。後剃髪小抱き来ゝ〻渡ゝ〻いん。又若君小ハ垢深られど此衣を着せゝ〻
待ゝ〻とて。懐中より亀山ゞ子乃衣服を取出して渡ゝ〻れば芙蓉も金道丸
乃綾の衣を取出して与ゝ〻白虫是を懐ゝて暗小私宅へと帰りなる

白虫懐幼主去國　并　雅明會亀山

斯て其夜の丑満頃白虫件の小児小金道丸の衣を着て密小芙蓉の方乃
丙舎へ忍び行。若君を取替ゝ〻懐小隠し懐ゝ再會を耳結て立別ぬ城内乃
西の方へ潜び足して到り。兼て足場ハ見置つ。塀際の松ゞ根元よゝ登りゝ
城外の堀を越るまゝ伸ゝる大枝を左右して傳ひ。難なく堀際へひらりと
飛下るゝ思ひもよらぬ前面の樹林乃裡より。七八人の者現ゝ出て手毎小
棒を振ゝ取囲ゝ〻り。此者ども小先小亀山小対ゝ〻い牛尾ゞ家子小ゝ其夜
主を対ゝ。當の敵の跡を追ゝれども行方を見失ひゝ邸舎へ立入て有ゝ次第
を語ゝれば。牛尾ゞ妻悪ゝ恨ゝ。亀山を捕て来ゝ〻ば金烏公小辞て重
く罪を負ゝとゝ〻ぐ。家子ども大小恐ゝ罪とゝ〻ぐ亀山ゞ行衛を尋んと
所ゝと捜ゝ求ゝ〻ども更小知られず。白折の城へ忍び来ゝ〻ると。霄より此林
由小埋伏ゝて居ゝる小。明近く頃城内より。覆面ゝたる大の男松ゞ枝伐木傳ひ
城外へ忍び出ゝ〻ん。偖こそ亀山なりと心得捕んと斯狼藉小及ひゝ〻り
白虫頗る驚ゝ〻とゝ〻ども。不来強勇多力なる上武技早業の達人なれば早く刀を
抜てゞ〻ゝ近付一人と二刀小斬ゝ落ゝ。續てゝる両人をも右ゝ左小斬伏ゝ。猶

白むー
ひろ君

幼君と懐ひく
日夫多
坂と踊る図

鬼鳥のごとく蒐く又一人を斬て落れ残る者ども此猛勇に辟易して
まどろに逃行と追うけて後より片手なぐに切れて後袈裟に斬れて仆と残る
八雲霞と林の中へ逃入りぬ其侍捨ぬ刀乃血と拭ひ鞘に納もる近寄金道花の
よく霖入りむつうるる金もかれむ白虫若君の彩と見て天晴御成長乃後を
よろ大将に成るべしと心ふりひ筑紫と志てぞ落行る却説垣の雅明を
馬来田が横死の後太息が牛尾を討て蒐行に驚て其身も其場を立退
熟思惟まるに毒薬に中て と言て亀山俄に正気付て牛尾を討立退て
と沙汰せむ金烏我と疑ひて如何あるべ身の難義に及んも量ぶ有活に中
野城へと皈て扁山里の寺に侍友の僧あれば其方へ到り身の上と語り頼
て一夜を明し何ぞ亀山が在所と尋ぬ渠が所存と実に上に別を定めんと
主の僧に乞て袈裟衣笠等と借て旅僧の体に身と扮装し面と覆掩笠と

深く被て白杵の城下と徘徊し鉢を乞体して家々と窺へども亀山が消息と
ぶ尋ねれば其日八寺へ皈り翌日白杵の近在を尋れども猶便を得ぬ尋
こべく寺へ皈らんと野道に入る処に俄に雨降出し雷とろと鳴ちきり小
雨只まぶれ降まく林の中へ弛入るに一宇の古廟あるふり見究竟乃
雨舎よと頓て扉を押開て裡に入に一人の士神前の机に倚りて眠り居
るが雅明が来入物音に眼を覚し思ぞ互に面を見合せに豈ろかんこれ
亀山太息かりれば雅明悄然と。亀山氏あるぞと言て笠と脱覆面と
とりぬ亀山も驚て雅明あるぞと言て雅明廟の扉と開声を低て曰行
や亀山氏我足下の在所と尋捜て多く辛苦まろ先足下に行故牛尾と
討て立退まるやと問亀山が曰其に就て深て巨細あり我御遣の好意に
依て毒殺と免るるとなれども皈城して存命せぬ金烏御遣を疑ひて我

とても主人の横死を顧ず空酔せしと雖も罪ふ行ふる者多ければ路をぐり慮り武町〻所詮一度は金烏ふ本家と押領せる者し。大厦の覆ん所一木の能支る所ふ非ず。皆く國を去く金烏と亡を者ん時節を待ん〻め。金烏ゞ脇股と頼む牛尾と絶く。聊恨を晴し立退しなり。事火急の折ふれば御道ふ意中を告る遑なく。其後は如何せんやと御道の変ぬ〻心ふ〻を思ども。唯ふ問者ん便もなく。其日は妾の家ふ潜し隠まし夜ふ入く橘白虫ふ示し合を者ん変有て彼邸舎行。和州石上ふは大伴の嬬男吹負公巨細有く蟄居し更ん彼方へ赴ん身を寄ん。此所まゞ来りふ数日心氣を労せし疲ふて平頻ふ睡眠を催し。此古庫ふ入〻一睡せふ不圖御道ふ面會し。〻意中を語り明をは憂の中乃怡なりと語り名ん雅明亀山ゞ遠ん慮を感じ。今まゞの疑ひを晴しと曰。実理りある牛〻ふあれど困ん果ふ小生ゞ身の上あり。毒茶ふ中〻と言し是下牛尾と絶く立退ん人等更金烏ふ何と陳謝を者ん絶のなく中野の城へ皈りゞ名ん其夜足下の跡を追行しども姿を見ん事ふ所〻と尋捜しども何〻も宜る者ん。想煩ひし面色も同るふぞ。太息も氣の毒ふ思ふ少時手を拱く沈思去るゞ膝を拍く曰我一計を得過日主君馬来田公中野の城へ赴ん多し節我を召し仰るは予九州探題職の官印を平日ふ身を離さゞ持ふも今日も酩酊して此官印を失ひ家の大事なり。你は下戸なれば酒ふ酔るも有ま。見を明日まゞ預るゞ〻渡しの人と畏て懐中せ小変化して白虫ふ渡るを失念し。今猶守嚢ふあり此印と我指料の刀を御道ふ進ん間此二品を持く中野城ふ立皈り金烏ふ呈して

ヤされんかハ先夜亀山迄狂て牛尾を対走りゆゑ其も亀山を対止
んと其跡を追ひかけ深き三尺三寸走りて落と見えけれども擒の所く
と尋ね漸く三日めに谷川に溺れ死る死骸を見あらはゞ面部岩石
にぶつて損ずゆゑ多く痕付て上水に流れ亀山も見えざるゆゑ
衣服帯剣に怨ある太息に紛なくゆゑ逐ひ求る品や有と懐中
を捜しに妬斯の銅印乃ひとつ是を奪取猶太息が帯刀も取
て持参仕まつると言れゐ金鳥素り九州の探題さへ支を受て此印
を得ば必ず心怡ぶん且此刀は先君大伴真人公より我に賜りし名刀
ふく金鳥もよく怨る刀なれば我死ると滅なりと御道を疑る勿
ゞ〳〵印と太刀を式子名れば雅明大に悦び推戴を示さるゝ如くみゞ
金鳥小生が罪を恕を〳〵されども大切ある官印と金鳥に与へハ如何有

んと言ゝに太息が曰其義ハ苦しゆゑ金鳥家兄を殺せ上ハ本家を
押領し大友皇子に願ひて九州の探題に任ぜらるゝ支治定なる然ハ官
印我手に有ても益の品なり但御道に一條の頼あり金鳥ハ馬来田公
乃恐敵なれば若君の御成長を待て対せすんハ我と白虫が忠義を
し並び御道が母妹の仇なり暫時手を下さゞ若君世に出ぬ時を待
俱に金鳥を対し眼を晴さるべし若君あゞ二歳あれハ若干の年月
を経て支叶ふべ此義を承引有や否と問れば雅明黙首是誠に左有
べき支なり義を思ひ若君成長まゝ金鳥を対
べき透間あるとの誓て我を対と不向盟をなしゝ太息起て
拝謝し如此あれば我ゝ何と憂べ〳〵と互に後来の支を示し合をり
雨止日も暮て月さし入れハ西人古屋を立出亀山を和州へ雅明ハ金孤ハ

まて〜まへ心ざし〜袖と分つ〜ぢうを別とする

雅明再仕金烏 并 尾呵責芙蓉母子

斯く垣の雅明八舎藏まて〜まへ之ぬ赤三更ホもあれば住僧ホ此程の情と尋ね〜謝し別と告ぐ〜立出直ホ中野の城へ馳到り城の小門とお敲れば監卒何者ぞと怒む雅明名と報ず案ホ主君の御用ホ之る品あり疾く門と開よと故意せ〜〜言ふ之ホ監卒當番の士ホ斯と達し〜れば其者八御咎の筋有〜見當ぎ〜捕捕ぬ〜と兼〜殿より御下知ホ疾門内へ通し捕ぎ〜曳来ると令ホ監卒其意と得〜雅明と門内へ入縄と掛〜當番の結所へ曳往ぬ當番の士より金烏へ斯と達し〜ぬホ白砂ホ曳居置ぬ〜の不知より即ち雅明と白砂へ曳居金烏の出座と待ホ之る程なく金烏立出〜雅明を見るより嗤と

睨ぬ你亀山と心と合し牛尾と対ぎ遠電せ〜ホ何の面目有〜白ぬり来るや我牛尾ぬ霊と慰る〜ぬ你ぬ五躰と一刎試ホ亀し刀の首ホ臨と待よ〜大声ホ詈ぬれば雅明些も動ぜず吏ぬ巨細を知ぬざれば憤り〜も理り有り小生も之ぬ敢む御刑罰ホ行ぬる亀し〜知ぬ日本君の鴻恩と蒙り〜ぬ御為ホ為ぬる亀ぬ義と言上せざるハ不忠ホ有れば死を顧ず夜中ホ〜之ぬ敢て縛ホ就く尊顔ホ向ひ〜ぬ先小生ぬ携し品ぬ一覧有て後御絆裁ある亀し〜と御ぬ金烏も我為とり〜ホ心遣ひ少し怒を和げ雅明ぬ携し包と取寄撿めぬる小生ぬ真人ぬ亀山太息ホ吁〜石切と号し刀ホ有れば不審ぬれば雅明ホ向ひ此刀ぬ亀山ぬ秘蔵の刀ホ〜ぬ你ぬ手ホ入れ如何ぬる故ぞと問雅明ぬ其刀の〜ホハハ〜ぬ君の御為ホ為ぬる亀ぬ品と侍中仕ぬ〜。但し他国ぬ

密夏のハヘで皆時人々と遠避あるる所しかぶ。金烏左右の近侍及び
當番の士縄取ホと退らしめ。自身五〻雅明が縛と解得させ。ホ雅明
懐中より探題の官印と錦の嚢ホ納し。仍て金烏が前ホ呈す。金烏ハ是を
把て嚢より印を出し見るホ正し〻探題の印あれば大ホ喜て雅明ホ對し
亀山が刀とられハ此印と所持せるゆ深く謂あるべ子細を語よとい ホつ〻
雅明亀山が刻の仍を。如斯〻〻〻と弁ホ申せ〻減〻やうホ述られば。金烏ハ是を
むしゝろの官印と得て大いホ喜び。俄ホ雅明を帝上へ招て上実とも叶い
ゝるゝホ此官印兄馬来田が所持せる事やと。刺殺せし時懐中を捜し
ゝるれども更ホ無ゝ。為白杵城の宝蔵と拔見仕と思へども。諸人の疑惑を
忌て今日まで黙止せしホ。豈ゝ人亀山が所持せんとハ。渠重代の刀大切の
印と。你ホ奪ゝハ狂死せしホ疑なし。ゝ存命せば。爭う撫〻你ホ奪ゝホ

屈ゝ。渠が牛尾を紂ハ心竟狂乱の業ホ。流石ホ名を得し剛の者ホ
是で最期ホ日頃の勇氣と表せし事是ゝ不測とハ屈ゝず其ハとれ
你死を恐ずとて。為敢り。我ホ官印を得させ。謄略見所あり。向後を武
士とホし我手廻ホ召使ひ得させん。心を責て忠勤を厲よ。ホ取せし亀山
が刀ハ當座の引出物ホ你ホ与る。と投与。たゞめの怒ホ子替て以の外の機
嫌なりゝれば。雅明是を聞て心ホ笑。低頭三拜して恩を謝し。是より以前
ホ信して金烏が心ホ合ひまゝり智を勝せし雅明あれば巧言令色と以て拜
と阿り縋ひゝるホど。金烏再難得者と思ひ。遂ホ出頭させゝる。斯て金
烏ハ探題の印を得ゝより愈心驕り。金道丸が後見と名して白杵城ホ居
住し。國政を己が心の仍ホ裁判し。ひゝるホ押領の色を顕し。名れども。門緑林の
輩も金烏が権威ホ恐し。維り其非を糺す者もなく。城中の諸士ハ亀山太

鳧行湯もゝぢ成り上橋白更さへ都の方へ赴く由遺書して妻妾と倶
に邸舎を立退るべし世の中も今の斯よと見限て心ある輩はねけ〳〵ふ城
と立退。義小疎く言甲斐なき族は皆金烏小紹ひ従ひ奴ふよう金烏
が我慢益増長し兼て心を奪ひ馬耒田の令室芙蓉の方と妻とせん
と侍女小命じて其義を勸め去むるとも。貞操を守る芙蓉の方爭
う夫の仇敵なる金烏と枕席を交る心あらんや。淫なる妻と絶勸る侍女小
は深く言辱すしあて遠避佛間小のみ困竜と亡夫の菩提を吊ふ間小
白魚小頭し金道九の妻と想ひけ。只世と憂るの小思ひ殺なる金烏
は芙蓉が心小従はざるを怒り愈心火と燒し。堪ふて自身芙蓉の方乃
丙舎ふりう對面して曰ふは。我金道九が後見せんゝめ。事繁き中野の政
務と捨て。當家の政道を執行幼稚の嬢を九州の探題と仰ぐせ

諸人の崇敬先代小勝るは金道九が我有が故なり。茲び家の乱子の乱
我心小従ひ。義と俱小して國家長久の要務と結合し。貞操も操も言
ふ。女心の狹く耶の操を守りて若我無人なる隣國乃諸將
當城を攻拔く所領を奪ふ。茲び金道九が命も保ちがた
夫の名跡も断絶と。是亡夫に對して不貞節の甚き為なり
ぢや。國家の安危金道九が存亡你が心一小あり。よく〳〵事の理非を弁
へ我心小従ひ。ひ〳〵と。尺〳〵布〳〵透〳〵口説くれども。芙蓉は半句乃
答もせず。只〳〵兎首念珠凡繰〳〵の居くれ。短慮の金烏堪ふと
大小憤り。是は聞くなれ女ふる你聾耳小でも有やらん。我名と迫舌と労
もうと言の答ぶせんと非礼なれ。大丈夫の一言は駟馬も追ぐ。我一旦口外
せし妻と空〳〵止し妻。強く操立せで。水火の責小ふけても心小従はぐ

止まれる。辛丸同まれぬまれぬ従ふと言る声雷のごとくあれば。遠ク間ニ隔て〻岸根猪尾聞つけ〻。何度ホやと走寄りみてあれば金烏面朱乃ごとく
ホなりあいや芙蓉と抓殺を図れ数人ある友猪尾殘丸中ホ分入金烏と練々〻曰。君之軍戦武略の道ホハ長じ給へども未だ男女の恋情を猶く
知ぬなど。婦人のあしらひ〻心ホ想ふ人ホくも差向ハ〻左右の答とあるふ
るのホ先御慣りをあさめられ其ホ委しく熟と今宮の御心底をも承り
利害と綜〻御心ホ従ハせまくられと言るるなど。金烏少〻怒氣を和らげ
給ひて你ホ托を図し。よく言宥せ〻我枕の塵を拂ハさせよ若猶従ぬもんで
辛丸呵責ふうけ。捕えれホても不ままで芙蓉ガ見る前ホ〻金道丸と呵責
し。我心ホ従人と中まじ。ほと殺ミ苦痛をるど見せよと命じ。席と蹴立て
立出る。猪尾ハ跡ま〻年吉と巧み。百般ホ勧めをうせども。芙蓉更ホ

答もせど承引図ん色ホ〻ホ猪尾ものあ〻其日ハ退丸次の日ハ三日ガ
間手とう品を替〻絞勧とも曽て従ハ体ハえざれば。猪尾も今ハ十計
尽く。芙蓉の方と一室ホ押籠。美と縫こめ〻褥の上ホ吐せ。昼夜耳根
ホ〻鉦太鼓をあせ現責ホ〻或ハ湯水と止め〻湯量ホ〻其余種〻乃
呵責をホをとる。十日絆ホ及ぬども。芙蓉の方乃貞操金石のごと〻些も揚
けざ。只ハ桃李の顔痩衰て色如菜。両の眼ハ泣腫て紅ホるる。浮ホ是
五義と悲む天人乃ごと〻。見る者涙と落さるハホうり〻。猪尾ハ芙蓉ガ堅
く従ハざる義を金烏ホ告れば。金烏大ホ怒激〻さバ女ガ目前ホ〻金
道丸を責さハあ〻心ホ従ハや否と問ハと。飽まぐを道の手ホ〻ぬ岸根
猪尾寄で継絶の理ある若君と宝ハ亀山子ホ苑彩情ケくも後手ホ縛り芙蓉の方の
目前ホ引居。乳汁を断〻種〻の糜〻丸菓子菓と見る前ホあ〻餓鬼

美婦
母子が
危難
異義
幼君と
まつの図

責ふ者〳〵名ハ弁へあれ小児乳味ふまれ飢渇ふ苦〳〵菓子菓子と見て身と
もに声を限りふ泣叫其声笑蓉の方乃耳ふ徴〳〵て錐を刺ろ〳〵ごと〳〵ふり
実子金道丸殿あるを亀山ご一子ふく終ふハ金烏ふ害せるへと思ひ定〳〵
吏おご〳〵子と取ろ〳〵夜の鶴卵と惜む焼野乃雉子生ろ〳〵生る者雉ろハ子を
思ハざ〳〵ん假令亀山ご子ろ〳〵も非道の呵責ふ責殺さろ〳〵と争ろ見ふ忍びん
あまりおろ我命あれバこそ罪あれ子と苦〳〵む亥頼あれ世ふ存命ろも金道丸ご
成長と待金烏と代亡と成ろ迫と惜ろ〳〵ぬ命と惜〳〵ご其も心の迷ひ方を
今ハ九泉の旅ふ赴ク仏の浄土へいろ〳〵あと心一ふ覚期ろ〳〵忍ち手と噛切
て死〳〵れハ猪尾ろ〳〵より仰天〳〵て永と立難ご延ふ怪〳〵ろふ築山の裡
より白髪の老翁忽然と現ご出叫び苦〳〵ふ木苑若と撞抱ク風より疾く
樹林の内へ走り入ろるふご猪尾又大ふ驚ク深退留よく呼ろおご其身先

庭へ飛下跡を追て尋ろ〳〵ふ辛迫〳〵ふ地ふ築山樹園隅〳〵隈〳〵
まで〳〵残る所なく尋捜ども更ふ翁の影ふ見えず其内多人殺を分く城
内城外〳〵の草と分〳〵尋ねども遂ふ行方知れず猪尾大ふ心を困ろ金
烏ふ吏の顛末と紛ろふ金烏大ふ其怠り咎叱り懲〳〵猶翁ご所在を尋
出せと厳〳〵令ご芙蓉ご死と悔〳〵惜めども其甲斐おれず掌中の玉と
失ひ心地〳〵空ニ紅屍と寺院ふご埋葬せろ

猪尾見雑夢 并 金烏過斬猪尾

金烏ご婆臣岸根猪尾ハ彼怪ク翁ご踪跡と日〳〵尋ゑ求ども愈以て
知れず余りふ尋ねび〳〵思慮と労〳〵或夜独り居房の内ふく燈ふ對〳〵
翁と捜〳〵出と居ク上まを凝ごる別ふよク思慮も浮ざれ思ひ屈〳〵
枕ふつク一睡と〳〵ろふ緒の下ふ啼ごく虫乃音耳ふ入〳〵眠と覚ク何心

たゞ泉載の方とうんぬるに俄に陰風吹起つて庭の樹木と鳴り今迫所
月影朦朧と曇りて只着地中より一團の陰火青く燒上るかと見て億
病未煉の猪尾大に発て身の毛竪ぶり怖るゝ猶見てあれば陰火衛
に高く燒上り先年蛇責の刑に行はるゝ月に夜ゝ姿と変じ長なる黒くゝ
肩より腰に至り白き衣の胸より下無潔り痩くる面益々青く両眼凄
く光り猪尾が面と眼しげに睨むかと猪尾爭ひ自若ゝ〻戦慄ゝ急に逃
んとすれど脚痺ゝ支離ぶと人を呼んとすれども声ゝ出ざれば益恐ぶ
生きる心地なく悶果る斗なり亡霊に困びる声ゝ如何や猪尾你ら吹革
とるかゝるぶんぶ妾金烏が側室となるぶ汝が勧ゝ友ぶを魅畜に
比し汝金烏が妾となり剌へ善実の罪に陷られ世に側多く刑戮に合せ
しぶ此恐生と変ても忘ぶゝ你も疾冥府へ来り俱に地獄の呵責を

受よと糸のごとく手とさゝ伸ゝ猪尾が衿上と搔抓ぶぞ〻ぶ絶も入
ゝ恐怖ゝ猪尾爭ひ恐ぶ〻ぶと声叫ぶと思ひ惘然と覺ゝ
是一場の夢なりしに猪尾漸ゝ心安ぶ猶胸の動氣は早鐘を
打如ゝ心神穏ぶゝ口渇ぶる中ゝ維を湯と持よと三言呼ぶに猪
尾が妻湯と汲持ゝ来り早三更近ゝ深ぶ〻ぶ湯を
さゝ出と猪尾湯と取んゝて妻の面と見れば見は如何夢中に月に夜
が顔に彷彿ゝ依ゝ大に驚ぶ湯と你に用ゝ女と見呼よ
と退ゝ續ゝ来る侍女の面を見れば見も同ゝ亡亜の面に見るに益
忌恐まゝ又立ゝせても皆月に夜が面に見るゝ恐ゝ退け猶夢のさめ
ざる心地にて心恍惚ゝて夜の明るを待ゝ幸と夜明れ早朝ゝ修験者
祈請ゝ攘の祈禱を修せしに是日より心地悩ゝ大熱出ゝ満身燒ゝ

〻〻熱氣に犯されさとりもなく譫語と吐時もなく刎起て座中を狂ひ回り
さて亡霊の又来るとて退くよと罵騒ぐ友妻及び看病とう侍女们
をてあて〻數度医師とあれども更に験なく狂病益〻熾なれば衆人商議
し垣の雅明へ今武士に執まられぬるとて原医師にて功者のやう高名にて彼人
を迎へて治療をこゝと垣が紆へ使を立る友雅明も朋輩とのに古参の猪
尾あれば黙止がたく金烏に斯と達へ〻しかば金烏も愛臣の猪尾あれば不便
に思ひ我も楽が病と訪ひ遣ばと爲〻そ雅明と呂連猪尾ら郎へを起き
〻〻岸根が従類大いに恐入厚〻尊敬〻病床へ請じ茶菓の管侍慇懃
と尽〻〻猪尾い狂ひ労て食の内に却て見えと知ざると妻夫とも起殿
自ら訪色めに疾起て畏りと申めと言れば猪尾岸破と刎起金烏を
〻〻嗤と睨て不義非道の奸賊你天子に背く大友皇子に一味〻親兄の
弓と作た寄佐伯連男と心を合て毒菓を呑せ上に刺殺し系嬌を昏て
途中の狼藉者の所為のがく巧らく弓が領地を押領し無法の憲慕
に妻を苦しめ死に就しめ我子とき人行方をもとめしむるに五逆罪とらふとも
飽くまでも彼縛とひく已が栄利を謀るとも天道争ふ其毒悪を免し難人看
よ〻頓て天罰你が身に報ひて身首所を異に〻恥を軍門に晒さしと四
隣に響く大音に〻散くに〻ぞ響く其音声を持て馬来田が声なりれ
む雅明が手に汗握る許なり生得火性短慮の金烏勃然と〻怒る心
頭より迸り佩くる太刀抜手も見せずに一刀に斬下る猪尾が勿ち両段と
なり一言も発せずに血煙の中に仆れと妻女侍女们大いに恐まく席中を逃
出る〻雅明も驚れぬ〻智者の者も見れば些とも動ずに血刀を振て庭の
池水に〻血を洗ひ浄め金烏に呈す金烏も大に怒氣收らず雅明に向

ひ病熱の譫語あゞ〻由あるに義と口ばしりたるの頃る非礼あれば斬て捨ぬ
郎中の者も只今の譫言て聞つゝ。あ〻他人に虎と時へ一大虚に成て禹
大実と吠のあゝ我世上に虚名と唱らる者〻依て郎中の奴ぞ二人も殘ぎ
斬て捨んと。你前後の〻を鎖て小児ゝも支もたの勿と不知〻けるを
雅明練て曰。御掟其理ありとやせども。狂病に〻跡形あるすと口ばしれ
る。猪尾に限り〻義あるに〻郎中の者と悉く殊〻に其身に覚有る
科あれ者て絲裂あゝ〻ある者と却て世に流布せれ〻者〻只に捨
て御殿館へとやられ金鳥実もとて其練に従ひ遂に臼杵へと飯ける
亀山寄大伴吹負霊狐報旧恩
却説亀山太息垣乃雅明に忌まく上方へ登り。和州石上なる大伴吹負
を任居へ尋ぬる。名と通じて對面とを乞る。抑此吹負とは馬来田金鳥の

兄に〻天性聰明今利ある上文を好く武に長じ曽て漂流の唐將李廣
とは人に就て孫呉の兵書陣法等と学び究め九州に名とあれる人傑
なり〻に大伴真人佞者の勧めに惑ひ逆臣藤戎人麻呂父子に味〻
と吹負去ば〻練言〻ふれども。真人練に従ひざ〻しば吹負家の泯滅ん
を慮り〻。暗に家と潜出緒國を往歴し。後石上に止まり妻を迎
て〻田畠と耕し。或近村の武士農夫に剣法を教軍学を授け〻〻
年月を送るうち父真人病死し二男馬来田名迹を継ぎ由ありて愈國
〻敬る念か〻石上に居住〻るかゆえに今日豊後なる本家の氏上の
山太息来つゝ對面と乞ふに吹負ゝ珍き心地し呼入て對面し
太息國遠して音信を断て我が茅屋へ何を有ゝ来るやと問ふに
山低頭平身して久〻疎遠のまゝ情と述吹負か安躰と賀して後國の

爰の一五十代孫に金道丸が成長するまゝ舎藏のうちゝ〜と頼れば
吹負姫さま臼杵の國乱と聞き大の孫丸馬来田が横死と悔く金烏が
篡逆と悪く且て亀山白虫が苦忠を賞して數歎息しつゝる國爰
ある上き金道丸が成長して世ふ出るまゝ〜平ゲ家ふ寓居せよと懇ふ言
くるわど亀山大ふ怒び深く息と嘆し見より吹負が絆ふ足と留め偏ふ
吹負と手のゝ〜敬ひ重ゝ〜。然るふ或夜更闌く亀山が部家の戸
叩わゝと打敲く者あり亀山維やゝ言はく戸と開くゝ見れば一人の老
翁抱丸くる小児と亀山が前ふさゝ置遥退去く土道ふ平伏しゝ亀
山怪しゝ灯剣ふ小児の面とうれば豈ゝ〜是白虫ふ〜ゝ我子乃末
苑若なりゝる友大ふ驚き夢ゝ〜心地と公羽ふ向ふ御身ハ何國乃何人
ゝ我小児と連れりゝるやと問ふ彼翁衛く幻ゝ〜不審の理

り御子と返しするふつゝ一條の物語乃ふ減ハ我人間ゝ〜先年百侍國ふ
分く御身のゝ命と助るふ白狐ふ〜ふ其砌御飯朝の船ふ便船しく
大日本の地へ〜ゝ筑紫ふ住て數〜乃養族の首領となりゝも偏ふ君ゝ命と
救ひのゝ〜友なれば其鴉恩を忘る時ハ〜ゝ今度の大変ふつゝ御身
忠義のゝふ末苑若殿と金道丸君の御身代ふ〜ゝ金烏ハ真
の雅君ゝと思絶ふ亡んゝ〜ゝ心ゝ〜ゝ心と義〜芙蓉の方と従ゝ
せん餌ふ〜ゝ手と下さゝ〜ふ芙蓉の方貞操と守ゝ〜金烏ゝ心ふ敢
く従ひのゝ〜と憤り岸根猪尾ふ命じて芙蓉の方乃目前ふ〜木苑
若殿と責恨しゝ芙蓉の方ハ其両責ゝ〜ゝ忍ゝ遂ふ自舌と噛切
く死しゝ〜ゝ〜ゝ〜ゝ金烏ゝ〜ゝ木苑若殿をも害せん更ゝ〜ゝ〜ゝ活命乃
恩を報せんゝふ我神通を以て助け進せ今木苑若殿を返しすり

いなり。更微細小語つとくるふとこ八ホ感じ禽獸とらへども霊あれば
恩と忘ず。我小児を助返せ。更と言葉を聞ホ汝を你らわどの神通あらば何事
幼主金道丸殿の御身と守護せよ。然らば即成功の後大伴家の守
護神と崇め春秋祭祀を怠らざる狐行角と言れば霊狐唯々と答へ
忽ち公羽の形を変じ。白狐の本相を現し亀山を再拜して。姿八足えぶりホ
くり。大鳥を數度感歎し。次の日吹負ホ縋して前後の始終を語り小児
を相見ホ入ム。吹負歎息し。金鳥八人ありて其行跡禽獸ホも劣り霊
狐禽獸ホ其行迹人間も勝れりとて頭ホ乳汁ある女を尋ね求
く木莢若を育させる。是ホ依て太鳥ハ益吹負が恩を感じ金鳥が
方へのぞえと悼ま依ホ名とり人相良部と名乗て吹負が家ホ留りける

大伴金道忠孝圖會前編巻之四畢